

ひと日和

揺らぐ吊い ⑤完

遺族の気持ちに寄り添いたい

見た目では原料が遺骨とは分らない。光の屈折率、硬度なども天然ダイヤモンドと同じ。遺骨・遺灰から炭素を抽出、精製し、高温高压状態で生成するダイヤが関心を呼んでいる。

「最初、ネットのニュースで知り、すぐピンとききました。自分がダイヤになって愛する人に身に着けてもらうなんてすてきじゃないですか。」世界26カ国に法人を構えるアルゴダ



「愛する人のために身に付けてほしい」と願う法月さんとメモリアルダイヤの数々。静岡市葵区両替町

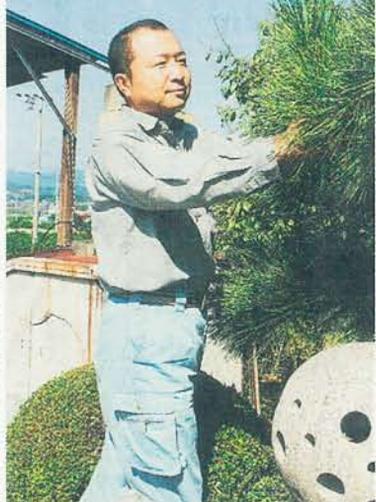


ンザ（本社スイス）の日本法人アルゴダンザ・ジャパン（静岡市葵区両替町）代表の法月雅喜さん（46）はこの世界に入ったきっかけをこう切り出した。

本社は2004年の設立。法月さんはその年、タイに在住。ちょうど生涯の伴侶となるタイ人のガンヤーンさん（35）と結婚していたころ。愛する人が現れていなかったならピンとはこなかったかもしれない。

「自ら応募。翌05年、法人化。『ビジネスとして成り立つか不安もあったのですが、最初の年だけで80個も売れ、潜在的なニーズを確認しました』と法月さん。

遺族から300名以上の焼骨を預かり、スイスに送って生成。売れ筋は0・3カラット強で50万〜100万円。決して安くはないが、今では北海道から沖縄まで全国から月20件の注文が入る。「高価なお墓の代わりに」という人はごく少数。愛する人と常にいたいという気持ちから注文する人がほとんどです」



墓参の代行業にも参入した船越さん。浜松北区細江町

以前、手元供養の一つともみていたが、今では死別の深い悲しみに寄り添うグリーンケアの一種と考え、カウンセラーの認定も受けた。「喪失感とどう折り合いをつけるかが大切。そのお手伝いができれば」

墓の荒れようは浜松市郊外の北区細江町も例外ではない。船越造園専務の船越貴久さん（57）が墓参代行業を始めたのは全国規模で代行業を展開する「まごころライフ」代表の知人に勧められたため。まだ首都圏ほ

ど荒れてはいないが、ここ数年、お年寄りからお墓の清掃や供花などを頼まれるケースも増えてきた。

まだ注文は月2、3件と少ない。ただ「今後、田舎でも高齢化と核家族化は進む。荒れた墓をそのままにしておくわけにはいきません」。

8年ほど妻とともに続けた遺言ノートの管理・実行を担う民間団体を解散したのは浜松市に住む60代の男性。「銀行や弁護士事務所などが数多く参入してきたのでもう潮時かなと思ったのです」

「愛犬の骨も一緒に」遺骨の一部を銀座の並木道に「赤いバラで棺（ひつぎ）を埋めて」など、わがままな注文も多くて、遺族との交渉にも苦労しました。と振り返る。あまりのわがままはのこされた人が救われな。大切なのは逝く人ものこされた人も感謝の心ではないでしょうか」（次回のテーマは「孤立」です）